



20年後の思い出を交えた手紙や写真など、タイムカプセルに入れられる伊達市立石田小学校の子どもたち。福島県伊達市

フタを開ける

58の歳が固唾をのんでアルミの箱を見守る。かちり。小さな手が、にぶく光る扉の鍵を、と掛けた。止もたいた息を吐き出し、子どもも

を、アルミの箱のタイムカプセルに大切に封印した。福島から新見へ

「あなたはバリバリ働いてますか」「お花屋さんには夢です」「放射能で育ができませんったことは覚えていきますか」。未来に宛てられた数々の言葉は、新見市まで約1.5kmを車で運ばれた。子どもに寄り添う

4月、新見市哲多町にある「公設国際貢献献大校」の資料室で、カプセルはガラス張りケースに入れられ、このままに保管された。比較的放射線量が高い石田小学校に埋められ、将来掘り起すことになるかもしれない。大校が開封の日まで預かり、守る。大校は11年前に開設した国際交流の人材育成機関。運営には国際医療後助団体「AMDA」(本部・岡山市)のAMDA国際福祉事業団が参画す

ちは口々に歌声を上げた。伊達市立石田小学校。福島県伊達市山田町の山あい。たまたみ、全校児童入りの小さな学校だ。3月20日、29人は20年後の自分に向けた手紙



未来への言葉守る

東日本大震災が起きた日の朝、永末はバリの自宅でパソコンのメール。動画サイトには、母国の街を津波が覆い尽くす映像が流れていた。「行かないさ」。幼稚園で子どもが泣いている映像を見て、突き上げるように思った。どんな形でもいい。子どもたちに寄り添いたい。だが、被災地入りは抱えた永末、切れない思いを隠した。大校は石田小と結び付け。

大校は震災直後から被災地に入って救援物資を運び、避難所運営に協力した。昨年9月、石田小をモデル校に支援プログラムを開始。永末はこれに加わり現地に入った。大校の理事長の野野利(特)は被災した瞬間から、今度は災害からの「卒業」が大事になる。正考える。AMDAの活動で世界中の紛争や災害を見えてきた。被災地の子どもは、足元に落ちた目録から少しずつ、顔を上げた距離を広い世界を見てほしい。こんな思いから国際学習を企画した。トルコ地震の被災者に子どもたちはメッセージ

を返り、駐日ベネチア大使館を頼んだ授業も行った。永末の授業も外国を身近に感じてもらった。学校を代表して東京のトルコ大使館(メッセージ)は「これまたトルコのことを調べようなんて思わなかったけど、興味

公設国際貢献献大校は石田小のほかに、津波で校舎が流された南相馬市立真野小、東京電力福島第1原発から半径20km圏に校舎がある同市立小高小からもカプセルを預かった。計約160人の児童が未来の自分に向けた言葉だ。大校講師の公文俊明(37)はカプセルを預かるこ

20年後に思いはせる

とで「生き方を変えられている」と感じた。いいかげんな生き方はできない。福島県で未曾有の災害を経験した少年少女が20年後、どんな大人になっているのか。20年の歳月を預かった者として、彼らの前で胸を張れる自分でないとは。取材を通じて関わった記者も、強く、そう思った。



伊達市立石田小学校の子どもたちの前で、タイムカプセル作りについて話す「公設国際貢献献大校」の野野利一(福島県伊達市)

「カプセルを開ける時、自分はどうなっているか、聞かなくて野野利永末(37)ははにかんだ。「結局、子どもは背筋が伸びて、世界の中の人と私とはつながっている」と考えた。世界の難民を助ける看護師になった。思い出す。20年間預かる責任に、野野利が伸びる思いがする。「みんな、絆という言葉を守って使う。で

も僕たちがしているのが、援活動。支援は「援」がやがて「縁」になり、つながりを深めていくとよく絆になる。僕たちは今、やっつ絆の入り口に立ったんだと思う」(敬称略、文・舩川佳直 写真・鈴木大介)